

小中学校のリソース教師の困難から捉える中国 のインクルーシブ教育の質 ——深圳市における質的研究——

CHEN Ruiyi

本研究では、中国深圳市における小中学校のリソース教師を対象とし、インクルーシブ教育の支援過程を質的に分析することで、インクルーシブ教育の「質」をどのように捉え直すことができるのかを検討したものである。中国では1990年代以降、「随班就读」政策を基盤にインクルーシブ教育が推進され、特に深圳市では「一校一室一師」政策を中心としてリソース教室の整備と配置が急速に進められてきた。しかし、制度の量的整備とは裏腹に、教材・研修の不足、専門チームの不在、役割の曖昧さ、家校連携の困難、教師の情動的疲弊など、多層的な問題が報告されている。本研究は、このような制度と現場の乖離が深まる中で、リソース教師が直面する困難、それへの対応、そこから生じる質的变化、および教育的帰結を一連の生成的プロセスとして明らかにすることを目的とした。

研究方法としては、深圳市内の公立小中学校に勤務するリソース教師6名を対象に、半構造化インタビューをオンラインで実施し、その逐語録をModified Grounded Theory Approach (M-GTA)により分析した。オープン・コーディングで抽出された概念を「困難(D)」「対応(R)」「質的变化(Q)」「教育的帰結(O)」の4領域に整理し、アクシャル・コーディングでは領域間の関係性を比較検討しながら生成的構造を特定した。最終的に、実践の循環性を示す生成プロセス・モデルを構築した。

分析の結果、第一に、リソース教師の語りからは、制度的・組織的・情動的という三層構造の困難が明らかになった。教材や研修時間の不足、専門チームの機能不全(D1・D2)、評価指標の不明確さ(D7)などの制度的困難は、校内の役割の曖昧さ(D3)、業務過多(D5)といった組織的困難を誘発し、それがさらに心理的疲弊(D6)や家庭との摩擦(D4)といった情動的困難へと連鎖していた。これらの困難は、単に現場の「問題」ではなく、制度の量的整備と質的未整備のギャップが引き起こす構造的連鎖であることが示唆された。

第二に、こうした困難に対して、リソース教師たちは単なる対処ではなく、支援実践を再構成する多層的な対応を行っていた。対応(R)は「協働再構成(R1・R4・R6)」「関係再構成(R2・R3・R7)」「情動調整(R5)」という三つの軸から構成され、制度的欠如を現場レベルで補完する協働の基盤づくりから、家庭との信頼関係の再構築、支援文化の共有化、そして感情の意味づけと再生へと広がる過程を示していた。特に、対応(R)と質的变化(Q)の関係は一方向ではなく、対応が変化を生み出すと同時に、その変化が次の対応の選択や方向づけを再編するという「双方向・往還的プロセス」である点が特徴的であった。

第三に、対応の積み重ねから生じる質的变化(Q)は、個人・関係・価値・文化の多層構造を持っていた。省察の常態化(Q3)や支援循環の安定化(Q1)などの個人内変化は、教師同士の協働関係の深化(Q2)を促し、さらに教育観の転換(Q4)や学校文化の包摂化(Q6)へと波及していた。最終的には、学校レベルの変化が制度改善への意識化(Q7)を生み出し、現場知が制度形成へフィードバックされる構造が確認された。

第四に、教育的帰結(O)は、児童・教師・学校・社会という複数レベルに広がる成果として現れていた。児童の社会的・情緒的成長(O1)、教師の専門性の再生(O2・O5)、家校関係の信頼化(O3)、校内支援文化の形成(O4)、制度改善への働きかけ(O6)、さらには地域社会における包摂理念の共有(O7)など、多層的な変化が相互に連鎖しながら生成されていた。これらの帰結は、インクルーシブ教育を単なる政策成果ではなく、現場の省察的実践から立ち上がる文化的・関係的プロセスとして捉える必要性を示している。

本研究は、以上の分析をもとに、インクルーシブ教育の「質」を、固定的・成果指標的な概念ではなく、「困難—対応—質的变化—教育的帰結」が相互に作用し続ける循環的・生成的過程として再定義した。特に、支援の質を支えるのは制度的整備にとどまらず、教師が省察と協働を通じて実践を組み替え続ける「過程の質(Process Quality)」であることを明らかにした点に理論的意義がある。また、本研究はリソース教師を制度の執行者ではなく、制度と現場を媒介し、支援を生成する「中間的实践者」として再定位した。この視角は、政策的には人的配置・研修制度・評価指標・家校連携の枠組みを再設計する必要性を示し、現場レベルでは教師の省察と協働を促進する環境づくりの重要性を示唆する。

一方、本研究は深圳市の6名を対象とした質的研究であり、サンプル数・地域文脈の点で限定性を持つ。また、質的变化の段階性や教育的帰結の長期的持続性については、縦断研究や地域間比較による検証が今後の課題である。しかしながら、本研究が提示した生成プロセス・モデルは、インクルーシブ教育を「理念から実践へ」つなぐ動的メカニズムとして、他地域・他領域への応用可能性を持つと考えられる。

以上より、本研究は深圳市のリソース教師の語りをもとに、インクルーシブ教育の質を支える

生成的プロセスを可視化し、理念と現実の乖離が続く中国の包摂教育の課題を、現場知から再検討する手がかりを提供した。